シンプルな放牧で高い生産性

足寄町・ありがとう牧場

アニマルウェルフェア向上への近道は放牧に取り組むこと。「ありがとう牧場」は、家畜と接するときの規範や心構えを意味する、「ストックマンシップ」に沿って酪農を続けています。

ニュージーランドで学び就農へ

足寄町は酪農が盛んな十勝管内にある、人口約７千人の小さな町です。「ありがとう牧場」オーナーの吉川友二さんは、北海道大学を卒業後、道内で有機農業を学ぶのですが、そのころから草食動物である牛に配合飼料を与えることに疑問を持っていました。

のちにニュージーランドへ渡り、現場を中心に放牧を学び、最終的には現地で牧場経営を担うファームマネージャーとして採用されました。そんな中で、酪農家にとっても、放牧することで時間と経済的余裕が生まれると実感したそうです。

真冬も外でたくましく生きる牛たち

「放牧によって日本の酪農を変えられるのではないか」という気持ちが高まり帰国。2000 年から完全放牧で牛を育て、生計を立てています。

牧場の敷地は 90ha（うち草地 70ha）。ご家族と２名ほどのスタッフで約 110 頭（うち経産牛 60 頭ほど）の乳牛を飼育中です。２月～４月に生まれた子牛たちは、40 日間ほどで離乳。成牛と同じように自由に牧草を食べていました。

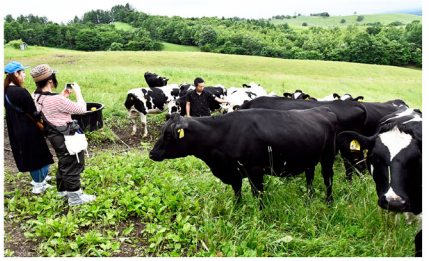
牛の力で荒れ地を変える

牛たちはとても人懐こく、手を差し伸べると寄ってきて、すり寄ったり、あちこち匂いを嗅いで舐めてくる子もいました。吉川さん曰く、牛たちの成長過程の中で性格も変化していくそうです。子牛の時は人懐こく、思春期の頃にはいったん人間と距離を置くようになり、成牛になると再び人懐こくなる、といいます。

乾物量にして一日に 20kg もの草を食べる動物のため、牛たちが同じ草地で食べ続けてしまうと、あっという間になくなってしまいます。

そのため、草地には電気牧柵を設置し、日によって行動できる場所を変えながら行動範囲を制限するのですが、一度感電した牛たちは柵に近づかなくなります。そこで吉川さんは、一度牛たちが学んだ後の柵には通電していないそうです。

広大な牧場も元々は急傾斜の湿地や荒地でした。藪なども多く、最初は人が草刈機を使って刈っていたそうです。そこに育成牛を放すと草は自然に倒れ、牧草の種を撒いたら牛たちの力で自然と牧草地になっていきました。「荒れた土地が放牧によって草地化するのを見て、放牧の凄さを日々体感しました」と吉川さんは振り返ります。



夏の牧場風景

豊かな農村生活を実現

搾乳は一日に２回。牛たちは自分たちの脚で歩いて牧草地から搾乳場（ミルキングパーラー）へ向かいます。行列を作る順番も牛社会が反映されており、先頭は立場の弱い牛、中間が一番強い牛、行列の最後は人間を怖がらないマイペースな牛……。道中で言葉通り「道草を食いながら」パーラーへ向かう牛たちは、とても伸び伸びと気持ちよさそうでした。

搾乳に向かう牛たち

ニュージーランド方式のパーラーでは、牛たちが搾乳を受けます。中央に垂れ下がっているミルカーで両サイドの牛の搾乳ができます。この方式を採用したおかげで、今まで２時間掛かっていた搾乳が半分の時間で可能になったそうです。搾乳が終わった牛たちは、誘導されることなく、また牧草地へ帰っていきます。

「ありがとう牧場」では、牧草が最も生育する夏季に全体の９割の生乳を搾れるように、季節分娩をさせて飼料費を抑え、冬季には飼い主自身の余裕を生むことを可能にしました。

吉川さんの元で放牧を学び、酪農家として独立したり、チーズ製造など６次産業化で生計を立てる若い卒業生も多数います。シンプルな放牧で高い生産性と豊かな農村生活を実現させることを、吉川さんは身をもって教えてくれました。（瀬川 綾子）

※ありがとう牧場
足寄町茂喜登牛 98 － 4
電話：0156-26-2082
ＨＰ https://arifarm.net/